

事例報告「図書館システム分館間デリバリ」

牧野 多完子

南山大学学術情報センター

E-mail: makino@ic.nanzan-u.ac.jp

概要：2000 年 4 月の新学部設置に伴って新築された南山大学瀬戸図書館と既存の名古屋図書館の間で、資料の有効活用を目的とする分館間デリバリシステムを採用した。システムの詳細と 4 月から 10 月までの運用状況を報告する。

キーワード：分館間デリバリシステム，図書館システム，南山大学図書館

1. 採用の経緯及び周辺データ

1. 1. 南山大学新学部設置・学部改組

南山大学図書館が分館間デリバリシステムを導入するに至ったきっかけは、2000 年 4 月に名古屋近郊の瀬戸市へ新キャンパスを設け、新たに瀬戸図書館を開館したことである。それ以前から、学内には地域研究センター等に併設される複数の図書室が置かれていたが、同一キャンパス内での利用者の移動は容易であり、デリバリという発想は不要であった。同じ学園組織である南山短期大学とは双方向の需要がそれほど高くないため、Inter Library Loan(以下、ILL)を通して貸借を行っているが、実際には徒歩 20 分程度の距離にあり、直接来館して利用することも可能である。

しかしキャンパスが 2 つに分かれた場合、限られた予算やスペースの中では、必要最低限以上の資料を重複して持つことは効率的ではない。そのため学部構成によりある程度分野をわけて所蔵することも必要となる。こうした流れを受けて資料の有効的な運用を目的としてデリバリシステムを採用することとなった。

1. 2. 瀬戸キャンパス及び図書館の概要

新しく出来た瀬戸キャンパスには 2 学部が設置された。学生数は次表のとおり。

学 部	所属学生数
総合政策学科	3 8 4 名
数理情報学科	2 1 7 名

所属する学生と約 100 名の教職員が瀬戸図書館の主な利用者である。

瀬戸図書館の総床面積は 3,167 m²、蔵書数 39,516 冊である。蔵書は情報関連、国際文化関連の資料を中心に揃えられている。閲覧カウンターは業者に委託しており、カウンター以外の閲覧業務、レファレンスサービス、事務などを専任職員 3 名と臨時職員 1 名で行っている。また、一般開放を行っているため、学外利用者へも閲覧・貸出サービスを行っている。

1. 3. 名古屋キャンパス及び図書館の概要

改組が行われた名古屋キャンパスは、人文学部・外国語学部・経済学部・経営学部・法学部 5 学部で構成される。学生数は下記のとおり。

学 部	所属学生数
人文学部	1, 5 4 4 名
外国語学部	1, 2 2 1 名
経済学部	1, 1 7 5 名
経営学部	1, 5 0 8 名
法学部	1, 1 7 2 名

名古屋図書館は、この他にキャンパス所属の教職員約 370 名、臨時職員及び学外者が利用する。

名古屋図書館の総床面積は 7,942 m²で約 74 万冊を所蔵している。職員数は嘱託職員を含む 40 名で、発注から整理までの業務を行う管理部門と閲覧・レファレンスサービス部門に大別される。この他に臨時職員などが常時 15 名程度で運営されている。瀬戸図書館に所蔵する資料の発注・受入・整理は一括して名古屋で行い、宅配業者による図書館便で配送される。

2. 分館間デリバリ

2. 1. コンセプト

瀬戸図書館開設に当って策定された基本構想の中に、「総合的なメディア(情報)センターと

*以下学生数、蔵書数は 2000 年 10 月 1 日付けのもの

しての機能を有し、最新のメディア及び情報機器に対応可能な施設とすること」「名古屋図書館とできる限り同一・同質のサービスを提供し、両キャンパス図書館の情報資源を共有して利用できること」が掲げられた。この情報資源の共有へ向けて電子メディア資料の充実と利用環境の整備が進められ、その一環として分館間デリバリシステムが開発された。ネットワークを活用し、システムマティックにデリバリを行うことにより、物理的に離れたキャンパスの資料を時間や距離の制限を感じることなく利用することが可能であり、利用者は移動中の資料の動態を OPAC で把握することができる。書架のブラウジングは困難でも OPAC による蔵書検索と取寄せにより、通常 1～2 日で資料は手元に届く。

管理面からは、限られた予算の有効な運用が見込まれ、或は手作業で行った場合に予想される人的負荷やミスを押さえられるというメリットがある。

従来から行っている ILL との違いは、学内構成員の中で行うシステムであることと利用者自身がダイレクトにオーダーできる点である。

2. 2. システム概要

システムは CILIUS(ver.4.1)をベースに、既存のプログラムを一部修正しデリバリ機能を追加したものである。取寄せを行えるのは、デリバリ対象館に設置された GUI 版 OPAC のみであるが、これは CILIUS が各クライアントマシンの ID を事前に登録し認証する形をとっているためである。

また、前提条件としてデリバリ対象館は同じ利用者データ及び書誌所蔵データを持つことが必須である。その上で CILIUS 上の定義ファイルに対象館を指定し運用可能な環境となる。

既存の CILIUS との決定的な違いは、取寄せをかけた資料は申込館での貸出が許可されること、「個人情報」で他館の資料を含む貸出状況を確認できることである。また、返却はどちらの館でも行えるのも特徴である。

システムの骨子は、数年前に学内で新学部設置が確定されて間もなく考案されたが、実際に現実的な仕様があがった後にも、その見直しや検討のため更に半年を費やした。その後テスト版の検査を行い、約 3 ヶ月後に本稼動となった。

2. 3. 運用と実績

ここに実際の運用と 2000 年 4 月から 10 月までの実績について記す。処理フローについては文末の図 1 を参照されたい。

- (1) OPAC からの取寄せ 【申込館】
- (2) 「取寄せ依頼票」出力 【所蔵館】
- (3) 資料送付 【所蔵館】
- (4) 利用者へ連絡(到着通知の掲示)【申込館】
- (5) 利用者へ貸出・返却 【申込館】
- (6) 「返送スリップ」出力 【申込館】
- (7) 資料の返送 【申込館】
- (8) 返却(返送データの解除) 【所蔵館】

物理的なデリバリは宅配業者に依頼しており、1 日 1 便が相互に届けられる。この半年間の名古屋から瀬戸への申込は 283 件、瀬戸からは 362 件である。名古屋への依頼が多いのは所蔵の絶対数とその分野のためであると推測されるが、単純に所属学生数の割合だけで推し量れば圧倒的に瀬戸からの利用が高いことがわかる。

2. 4. 今後へ向けて

現行のシステムにはいくつか改善すべき点がある。まず CILIUS が独自のアプリケーションであるため、各クライアントマシンはそれぞれにその機能をインストールされなければならない。Netscape や Internet Explorer が一般的になった今日では、そのメンテナンスはかなり不自由である。これは CILIUS を導入後、約 6 年間に設置されたマシンが Windows3.1 から Windows2000 まで多様であるという当館の事情にも拠る。前述したがマシンの ID で認証を行っている点も挙げられる。このため両キャンパスのマシンの設定を 1 台ずつ整えなければならない。もし、これがログインする利用者の ID や IP アドレスのセグメントにより許可することができればその管理の簡素化が見込まれる。

これらについては、現在開発中の NeoCILIUS により解消されることを期待している。Web ベースの機能を持つことにより学内外の利用者への快適な利用環境が整備され、キャンパス間のみならず学園内の様々な図書室とシームレスなネットワークを構築することが可能となるであろう。

(図 1) 分館間デリバリ処理フロー

